

近藤卓先生の著書「乳幼児期から育む自尊感情」を読んで

1. はじめに

今回は、近藤卓先生の著書「乳幼児期から育む自尊感情」を読んで、私が学んだことをまとめました。社会的自尊感情と基本的自尊感情など、児童保育を行う上で大変勉強になりました。

2. 私が学んだ内容

自尊感情には「社会的自尊感情」と「基本的自尊感情」があります。「社会的自尊感情」とは、他者からほめられたり、認められたり、成功体験を積んだりすることによって高まる感情で、他者との比較に基づく相対的な優劣による感情です。「できる」「役に立つ」「価値がある」「人より優れている」ということで「自信がある」という状態です。ほめられることで社会的自尊感情は高まりますが、叱られたりするとその感情はしぼんでいき、きわめて不安定な自尊感情です。親や教師は、勉強を頑張っ、少しでも上位を目指すように叱咤激励し、勉強が順調に進めば成績が向上し社会的自尊感情は高くなります。しかしこの感情には際限がなく、終わりなく競い続け、勝ち続けなければならないレースは、こどもたちを疲れ果てさせます。中途のいずれかの段階で大多数のこどもたちは敗者となり社会的自尊感情がつぶれます。人が社会のなかで向上し、挑戦するには、社会的自尊感情は欠かせない大切な感情ですが、人が生きる上では、さらに大切な感情の領域があり、それが「基本的自尊感情」です。「基本的自尊感情」は、成功や優越とは無関係に、自分の良いところも悪いところもあるがままに受け入れ、自分を大切な存在として尊重するものです。他者との比較に基づくものではなく、絶対的で無条件の感情であり、根源的で永続性があります。満足感、やすらぎ、安心といった種類の感情で「生きていていい」「このままでいい」「これ以上以下でもない」「自分は自分」と無理なく自然に思える感情のことです。ふくらんだりしぼんだり、つぶれてしまったりする社会的自尊感情を、下でしっかりと支えてくれるのが基本的自尊感情です。これは、人生の中で何度も経験するはずの挫折や困難を乗り越える原動力になるものといえます。

自尊感情は、基本的自尊感情と社会的自尊感情のバランスがとれていることが大切です。基本的自尊感情は「強くする」ものであり、社会的自尊感情は「高める」ことです。基本的自尊感情は地道な作業によりじっくりと育まれ形成されます。社会的自尊感情は、挑戦と競争と努力によって高められ、また要求と成功の関係によって高められます。要求に応えることで達成感を得たり、その成功についてまわりから称賛されたり、さらに次の成功を求めて挑戦したり、それだけの能力に見合った役割を与えられたりして、ふくらんでいきます。では、基本的自尊感情はどのようにして育まれるのでしょうか。その鍵は「共有体験」です。共有体験とは、信頼できる他者と五感を通じた体験をともにし、その時その場でともに感じ合うこと。すなわち「体験の共有」と「感情の共有」のことです。幼いころに親と一緒に道端に咲くタンポポを見て「かわいいね」と微笑み合うこと、おもちゃで遊んで「楽しいね」と笑い合えることなど、体験と感情の共有を通して、こどもは「かわいい」「楽しい」と感じる自分が間違っていないことや、そう感じる自分を親に受け止めてもらえていることを実感します。基本的自尊感情を育むには、日常の中のなにげない共有体験を地道に重ねることが必要です。

KM テクノソリューションズ代表 南側晃一